

「みんなのヒーロー」

人の暮らす街の少し上、よく晴れた空を何かが気持ちよさそうに飛んでいます。

名前はなしこまどん。いにしえより皆の街を見守ってくれているありがたい狛犬さま。いつもなら人に見えないようにとうめいになって神社やお寺にいるんだけど今日は何をしにきたんだろう？

「今日は松戸市でお祭りだどん！ この日のためにてるてる坊主をたくさん作ったし、皆には楽しんで欲しいどん！」

十月とは思えないぼかぼかなお天気はなしこまどんのお陰みたい。なしこまどんはいつもこうやって陰からみんなの事を支えてくれているんだ。何かがあっても最後にうまくいくのはなしこまどんのお陰なのさ。

「わっちが来たからにはお祭りも大成功間違いなしだどん！」

そんな優しいなしこまどんはお祭りで困ってる人がいないかパトロールをしに来たみたいだね。

「そんなー！ このままじゃお店を開けないよー！」

どうやら早速トラブルみたい、この声は道沿いの屋台からみたいけど、一体どうしちゃったんだろう？

なしこまどんが屋台の中を覗いてみると、開店の準備をしているお姉さんが頭を抱えています。困っている人を見過ごせないなしこまどんはお姉さんに見えるようになって話しかけました。

「お姉さんどうしたんだどん？ わっちに相談してみろどん！」

「どうしよう、まさかこんな事になるなんて、変なためきまで見えるし私疲れてるのかな」

「変じゃないしたぬきじゃないどん！ わっちはなしこまどん、こう見えてもありがたい狛犬だどん！」

ご立腹ななしこまどんはそう言う胸を張り、どや顔でありがたそうなアピールを見せてます。あつげにとられたお姉さんはしばらく固まった後、少し落ち着いてきたのか話してくれました。

「正直に言うとは今は猫の手も借りたいくらいです」

「猫じゃないどん狛犬だどん」

「よかったら聞いてほしいな」

そう言うとお姉さんは自分の事を話してくれました。どうやらお姉さんは今日の屋台の主役と言っても過言ではないという特別なネギを買い忘れてしまったみたいです。お祭りはもうすぐ始まるのに、このままじゃ屋台が間に合わなくなってしまいます。

「なるほど矢切ネギどんか、あれは大人気だしすぐに集めるのも中々難しいどん……」

矢切ネギとはネギの中でもまるで果物みたいに甘いネギの事で、とっても美味しい代わりに人気ですぐには手に入らない物でした。

「あれじゃないとダメなの、あの甘い味をお祭りでみんなに美味しく食べて欲しいんだ」

落ち込んだ様子でそう言うお姉さんに、なしこまどんはやれやれといった様子で胸を張って言います。

「仕方ないどんねえ」

「なんとかなるの？」

そう聞かれたなしこまどんはどこからかスマホを取り出してあちこちに電話をかけ始めました。

『うん、そういうことどん。じゃあ後は頼んだどん』

『そうなんだどん、困ってて。大丈夫かどん？ 助かるどん！』

そうしてしばらく電話をしていたなしこまどんは、満足そうにスマホをしまい親指を立ててニツと笑いました。

「もしかして！」

期待の眼差しを向けるお姉さんに対してなしこまどんは満面の笑みで返します。

「一時間後には農協。農業協同組合ってところから届くように手配したどん」

「間に合ってない！ もっと魔法とか使って空から届いたりするのかと思ったのに」

「そんな事むりだどん」

「そんなあ、このままじゃお店を開けないよ」

もう一度落ち込んでしまったお姉さんに、なしこまどんが続けて声をかけようとしたその時、屋台の前にはいた気前のよさそうなおじさんが話しかけてきました。

「ようお嬢さん！ ネギがないんだべ？ うちも矢切ネギにだけはこだわってるから、届くまでこいつを使いな！」

そう言っておじさんは屋台のカウンターにどさりと矢切ネギの箱を置いてくれます。その後にもエプロンをしたおばさんや配達員のお兄さんなど街の人たちが次々とお店の前にやってきました。

「困ってる時はお互い様よ、このネギの良さがわかるなんてあんた若いのにやるわねえ」

「余分に運んでしまっていたネギがあったので持ってきました！ 判子だけお願いします！」

みんな揃って手には矢切ネギの箱を持っています。どうやらなしこまどんは周りのお店や業者さんにも電話をしてくれていたみたい。

「全くもう、話は最後まで聞くどん」

「ありがとっ！ なしこまどん！」

涙ぐんで笑うお姉さんに、なしこまどんは今日一番のどや顔を返してくれました。

「街の皆さんもありがとうございます！ これでお祭りが始まるまでに間に合います！」
お姉さんがそう言うのと街の人達は暖かい言葉と笑顔で返事をして、それぞれの仕事に戻って
いきました。

「でも急だったのになんでみんな助けにきてくれたんだらう？」

「今の人たちは普段農協にお世話になってる人たちだどん、農協が街の人達に信頼されている
からこそ名前を出したらすぐに助けにきてくれたどんな」

「そっか、農協さんにも感謝しないとだね」

「今は名前を覚えておくだけでいいどん。じゃあお店頑張るどんよ！ わっちはパトロールの
続きだどん！」

「うん！ またね！」

一仕事終えたなしこまどんは満足そうな顔で頷くと、透明になって空高く飛び上がりました。

「良い事した後は気持ちがいいどんね。さーて、パトロール再開だどん！」

そう言うてなしこまどんはまたお祭りを眺めながら空をただよい始めました。

なしこまどんはいつも、どこかで、誰かの為に。陰ながらサポートをしているのです。

どうしようもない困り事がある時、もしかしたらあなたのところにもなしこまどんが助けに
来てくれるかも……？ なんてね。

『おしまい』